

経営者「環境力」クラブ 2023 年勉強会

7月11日（火）開催の経営者「環境力」クラブ勉強会の内容をご紹介します。

（事務局）

「SLOW IS BEAUTIFUL ～自分の仕事を パラダイムシフト～」 青山 裕史 氏（油藤商事株式会社 代表取締役）

2011年の東日本大震災の際、現場で不足していた燃料供給の要請を受け、ガソリンや軽油・灯油を現地に運んだことが現在の活動の原点にある。震災の翌日には、千葉の青年会議所の仲間からの依頼を受けて軽油 14klと重油 6klを提供した。日本生活協同組合（co-op）連合会も全国に支援要請を出し、当社も付き合いのあった co-op 滋賀からの依頼を受け、3月17日に当社のタンクローリーで大雪の中、滋賀から仙台まで軽油 4klを運んだ。仙台では全国から集まった支援物資を避難所に運ぶトラックの燃料が不足しており、co-op みやぎを拠点に給油を行なった。仙台からの帰路、今度は群馬県高崎からの依頼を受け、とんぼ返りで3月19日に高崎に燃料を運び、更に3月28日から3月31日かけて再び仙台へガソリンを運び、深刻なガソリン不足が発生していた現地の方々大変喜んで頂いた。

この協力活動の経験や、震災被害や原発事故の状況、その後の復興の遅れなどをつぶさに見たことから、自分でもボランティア活動をしなければという意識を持つようになり、以後、琵琶湖の清掃活動をはじめ、全国各地の災害ボランティア活動を、学生にも声がけして積極的に行っている。常総市、彦根市などでのボランティア活動のほか、2016年の熊本地震の際には、これまでの経験から燃料不足を予測し、発生二日後には迅速に燃料の提供を行うことができた。九州北部豪雨災害、西日本豪雨災害、台風19号による千曲

川氾濫の際にも災害ボランティアとして現地に入り、今年は和歌山県かつらぎ町の水害現場でもボランティア活動を行った。

ボランティア活動の現場では時として参加者のやる気「スイッチ」が入る場面があり、そうした経験を通して成長した学生や若者を数多く見てきた。ボランティア仲間の間では「できる人が、できる時に、できる事をする」が合言葉で、誰でも各々の立場でできることがあり、私もガソリンスタンド経営者としてできることを実践したいと考えている。

2030年までのSDGs達成目標に中小企業が取り組む際、17個の目標のどれに合致するかという視点で考えがちだが、17目標全体をかみ砕いてSDGsの本質を考えると、中小企業にとってのSDGsとは、①中小企業にしかできないイノベーションを起こす、②地域の経済への貢献、③地域の人材育成の三点に集約されるだろう。明治28年創業の油藤商事は地域に根差したENEOSガソリンスタンドだが、①～③を実践し、ガソリンスタンドの<スロービジネス化>を念頭に、バイオディーゼル燃料製造など独特の取組を行っており、地域の小・中学校だけでなく全国の様々な団体から多くの見学依頼がある。スロービジネスとは、お金や効率、スピードを追い求める「ファースト」なビジネスとは違ったもう一つの仕事のあり方だ。「独り占め」ではなく「分かち合い」、環境を「破壊」せずに自然と「調和」し、「モノの豊かさ」よりも簡素でも楽しい「心の豊かさ」を重んじ、人と自然と生き物すべての「いのち」を大切にし、自分らしい「生き方」と「働き方」が重なる仕事の仕方をする事だ。そのためには、誰も困らない仕組み（近江商人の三方よしの

理念)を近くでまわす(地域循環型社会・持続可能な社会)ことが基本になる。スロージネスの実践でサービスステーション(SS:ガソリンスタンド)の潜在力は非常に大きい。SSは災害に強い構造で(空間力=スペース)、アクセスしやすく(立地力=ロケーション)、全国各地に40,000カ所もある(点在力=ネットワーク)。これらSSを資源ごみ回収、地域貢献の拠点、障がい者雇用の場などに活用できれば、ガソリンスタンドのネットワークは社会的に大きな影響力を持てるだろう。私も実践者として社会に役立つ様々なチャレンジをし、積極的に情報発信し、事業を成功させることで他のガソリンスタンド経営者にも取組が広がることを期待している。

ITやスマートフォンの普及など社会の急速な変化に伴い、職業も大きく変化し、2011年に小学校入学の子供の65%は、2027年の大学卒業時に今存在していない職業に就くだろうという予測があるほどだ。ガソリン車がなくなればガソリンスタンドの仕事も変わらざるを得ず、今後、自分の仕事をパラダイムシフトしていく必要があるだろう。

油藤商事が25年前から取り組んでいるバイオディーゼル燃料リサイクルは、地域でのエネルギー循環を促すもの。この燃料は植物性の廃油からつくる軽油の代替燃料で、家庭や学校、職場などから廃食油を集め、ガソリンスタンドの精製工場で製造し、配送トラックや工事現場の重機などに使われ、地域でのエネルギー循環を支えている。この燃料の製造はSDGsの目標7(エネルギーをみんなにそしてクリーンに)と目標13(気候変動に具体的な対策を)に対応し、CO₂排出量を実質ゼロとカウントできるカーボンニュートラルな製品だ。この取組では人間を循環の一部と捉えており、モノを作ってから環境保全を考えるのではなく、「気持ちよく便利に生きるために役立つものをつくる」と「地球環境

を良くすること」の両立を実現することが重要で、バイオディーゼル燃料製造もその一つだと言えよう。

＜主な意見交換＞

Q: バイオディーゼル燃料製造過程で発生するCO₂について、LCAでの削減効果を数値で示すと説得力があるのではないかと。

A: LCAの観点など、様々な意見はあると思うが、自分達のエネルギーを自分達で集めているという物語があり、自分事として取り組むことでマイナス部分を補うと考えている。

○自分事にすること、共感(empathy)があれば環境活動も腹落ちするところがある。西武信用金庫では、新入社員に林業体験を行うことで、自分事として認識が高まった。

○ストーリーがある活動であり、我々の意識に訴えかけるところがあると感じた。経営者は目の前のニーズに対応することが求められているが、未来のニーズを視野に入れた現在の価値観の大変革が必要であり、今、価値意識の転換点に掛かっていると暗示されている気がした。

Q: 最近のバイオディーゼル事情は？

A: バイオエネルギーはローカルなものだが、菅政権が示した削減目標の影響か、大手商社、ゼネコンなどから問い合わせや見学申し込みが相次ぎ、潮目が変わった感がある。グローバルに展開することは難しいと考えており、そのように説明している。

Q: 油藤商事の成功要因は？

A: ボランティア活動が事業に結びつくことを実感している。ボランティアに行った直後に仕事が舞い込んでくる経験を何度もしており、人のために働くことで生まれたつながりや信頼が関係するのもかもしれない。

(文責:事務局)